

# 直井 潔——人と文学 (二)

唐 井 清 六

## Ⅲ

直井氏の第一作「清流」は、その題名さながらに清々しい恋愛小説である。

主人公章三は、戦場で得た病でほとんど全身硬直になった身体を療治するため伯父と兄に付き添われて鳥取の三朝温泉にある傷痍軍人療養所へむかう。兵庫駅まで担架で運ばれ、省線電車で大阪駅に着いたときには、折からのラッシュ時の雑踏のなかで、章三はやくもぐったりと疲れてしまう。

《「どうだい、行けるか。え、行けるか。行けないやうだったら今の間だぜ」心配さうに覗込んで訊く兄の言葉にも彼は、只頷くばかりだった。

此処まで見送って来た妹は、窓の前に立って心配から泣き出しさうな顔をしてゐた。

発車までの一時間が章三には恐ろしく永いやうに思はれた。漸く発車の号鈴が鳴った時に、彼は始めて妹の方へ顔を向けた。

「お兄ちゃん。向ふへ行つて若し、女の附添が許可になるやうなら直ぐ知らしてね。」

汽車は一つ、ごくと揺れて徐ろに動き出した。見送人、駅員、弁当売等の姿が後へへ流され、プラットフォームの柱が一つづつ

次第に早く眼をくぎりながら汽車は漸く喧々たる構内から抜けて行った。

妹は章三の窓の前、三尺程の所を半泣きの顔で小走りに追つて来たが途中で追ひ切れなくなつて、

「お兄ちゃん」と二、三度ひきつけるやうな声で叫ぶのが聞えた。章三の頬には一条涙が流れた。

「章三が出征する時は威勢がよかつたのに」叔父は吐息をつくやうにそんな事を云つた。《

文字どおり命がけて辿り着いた療養所であつたが、そこでの生活は章三にとって予期以上に意味のあるものとなつた。なによりも温泉療法が、章三の病気に効力があつたこと、そして周囲の人のところが章三を包んであたたかかつたからである。医師も看護婦も親切であつたが、とりわけ《雪で磨き上げられたやうな稍々冷い感じのする美しい勝気さうな》谷看護婦がよく尽くしてくれる。慰問に貰つた饅頭がさわり、夜半、腹が痛みだし苦しんでいるのを、自身腹が痛む夢をみて目を覚まし章三を助けるところや、章三がはじめて松葉杖で歩けるようになったとき、だれよりもそのことを喜んでくれるところなど、地味だが、心に残る挿話が語られてゆく。章三には彼女の自分に対する好意がしだいに確信に近いものに感じられるよ

うになり、彼女との結婚を真剣に考えだす。一生、不具者であることがもはや決定的となった自分に、これからさき、彼女以上の伴侶は望めまいと思うのだ。

だが、ある時、松葉杖で戸外の散歩が許されるようになった主人公は、ふと硝子窓に映った自分の姿をみて愕然とする。松葉杖にすがって両足揃えて歩くさまは、時計の振子を連想させるような醜いものだったからだ。煩悶の幾日かを送ったのち、章三は思いあがった自分の考えを打ち消そうと懸命に努める。そして、回復の限界にきた折ではあり、いったん退所を決意するところで作品は終わっている。

《夕食後最後の散歩に出る為誰かに、衲よけに靴下を穿かして貰はうと思つて看護婦の詰所へ行くと丁度谷看護婦一人居た。

「まだお仕事があつたのね」彼女は淋しく笑つた。

「いよ／＼これが……」章三がかう云ひかけると前屈みになつて靴下を穿かしてゐた谷看護婦が急に「そんな事、いやいや」と烈しく章三の言葉を打切つた。

その烈しさに章三はグツと胸をつかれた。靴下を穿かして貰ふのが却々暇取つた。そしてやっと穿かして貰ふとその足へポツリと落ちた彼女の涙を感じた。》

「清流」は、発表当時、かなりの反響をよんだようだ。「新潮」(昭和十八年五月号)の「四月の小説―鼎談月評―」(出席者・岡田三郎、高見順、伊藤整)では、島崎藤村「東方の門」、横光利一「旅愁」などと共に「清流」がとりあげられている。岡田三郎、伊藤整は概して好意的、高見順は批判的で、高見は「東京新聞」(昭和十八年四月一日)の文芸時評に於いても「技術の桎梏」と題し、かさ

ねてこの無名の新人の処女作を論じている。高見の不満としたのは、「清流」の創作技術が既成のそれに頼りすぎているために、内容の突っこみ方が足りないというのであった。伊藤は、この作者の筆力をはじめてものを書いた人とは思われないと評価しながらも「僕は読んでから、書けないと当人が思つているところが随分あると思う」と述べている。また、筆者は未見であるが、田宮虎彦は、この頃だしていたある同人雑誌のなかで、「清流」は濁流であると断じたいらしい。

これらは要するに、この作品がある種の綺麗事にすましているところのあることを言つたものか。

しかし、この小説の美点は、鼎談のもう一人の出席者である岡田が「一人の歌としてよく書いておりますね」と述べるように、如何に踏み躪られても、春をむかえて吹きだしてくる新芽のような、ういういしい青春の情感が、作品全体に心地よく漲っていることにあると思う。その意味で、この作品は戦時下に生まれた特異な青春文学であるともいえよう。決定的な十字架を背負わされながら、あたく限り潔癖に処そうとする主人公の生きざまからは、襟を正さずにはいられないような、純な感銘をあたえられる。

志賀直哉は、これらの批評の掲載紙を一括して直井氏のもとに送つたようで、それに添えて「此批評何の事やら此間の座談会で大分書いた経験ある人といはれてこれは又素人の見本と云ふ 批評はかう云ふ無責任なもの多い事を知つて置かれるのもい／＼のでお送りします」(昭和十八年五月十一日付書簡)、「『清流』は濁流ではありません」(同年六月二十九日付書簡)などと書き、氏を激励している。

「清流」につぐ第二作は「母親」である。この作品については、

作者に次のような文章がある。

《その主題は重症病棟の個室に収容された患者達の付添についていた母親達の群像を描く事で、母親というものの愛情を表現したい気持ちのもだった。

その中に一人大部屋にいた患者で、急性肺炎を併発し、僕の隣室に移されて来た時には既に危篤状態で、意識も朦朧としていた。そこへ病院からの電報の通知で馳せつけて来た母親が、まるで狂気のようになって息子の体に取りすがり臆面もなく大声で泣き乍ら、必死になって吾子の名前を呼び続けた。然しその甲斐もなくその二日目の真夜中に一旦その息をひきとった。それでもその母親は猶も諦めずその息子の名前を呼び続け、担当医師や看護婦の制止もきき入れようともしなかった。ところがそれから二時間程して文字通り奇蹟的に又その息を吹き返した。(略) そうした実際の話等を織り込んでの何人かの母親像を描いてみた。》(「一縷の川」)

話の中心は、ここに述べられるように絶命後も息子の名前を呼び続けて、ついに冥界から息子を取り戻したという、ほとんど信じられないような奇蹟を実現した母親の挿話にある。

この作品を読んだ志賀直哉は、十月二十四日附の葉書で氏にあって「『母親』いいと思ひました。瀧井君か川端君にも見せようと思ひます。母親の本能的な愛情がなまで出てゐる點が好きです(略)書いたものあればもっと見たいと思ひます」と書いています。さきに引いた母の死に際して送られた悔み状のなかの「君の今度のもの読んだ人は皆好意を持てゐます、素質のないものあるといふ事は技巧的なよき以上のものです」とあるのもこの作品のことである。

世評もおおむね好評であった。「日本浪漫派」の芳賀檀は「東京

新聞」(昭和十八年十二月四、五日)の文芸時評で「日本の真摯な地盤」を掘り当てたものとして「よく其の太く逞しい民族の本質を表現し得た点に於て、改造の『母』(直井潔氏)は一つの発見であった。こゝには何の身ぶりや美化の要素のない。たゞ粗材としての、家乡的な人間が寧ろ文学的、精神的に貧しく、鄙びた姿で描かれてゐるにすぎない。精神的な高さや、意識などから却て遠ざかったかに見えるこの作品が、かくも僕らの心を打つと言ふことは、こゝに盛られた生命の豊かさと逞しき、日本のちかの本性の真に迫った故である。僕ら文学の生命の血統がどこに属し、どこにしっかりと根生へてゐるかを、未分未発の状に於て、生々と見せて呉れるからである。」などと書き、この作品の批評のみで時評のほとんどを埋めていた。

「母親」は、また昭和十八年下半年(第十八回)の芥川賞候補作品に選ばれた。銓衡委員のひとり川端康成は、この作品を「芥川賞によって推挙するまでもなからうと尊敬して」候補の圏外においてことを選評に書いている。ちなみにこの時の受賞作品は東野辺薫「和紙」であった。

「母親」は直井氏にとって愛着の深い作品のようである。この作品にかぎらず、氏の作品にはよく母の姿が描出される。それは見方によれば、夫とはやく死別したのち生活と苦闘し、さいごは不治の病にとりつかれた息子の看護に献身して死んでいった母に、氏が捧げる鎮魂歌の如くである。(次号完結)